

日英語の指示表現とその翻訳

清水眞*1 宇津呂武仁*2 中村順一*3

*1 東京理科大学理学部第一部教養学科 *2 奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科自然言語処理学講座

*3 京都大学大学院情報科学研究科知能情報学専攻

makoto@rs.kagu.sut.ac.jp, utsuro@is.aist-nara.ac.jp, nakamura@media.kyoto-u.ac.jp

1 はじめに

従来、日英語の指示表現はほとんどの場合、それぞれが代名詞、再帰形、名詞句に翻訳され、ほとんど自動的に対応がとれると考えられていた。しかし、コンピュータコーパスには多くの反証を見いだすことができる。著者たちは、一連の研究で、和英辞典、英語の小説とその翻訳などのバイリンガルコーパスを用いて、再帰形を中心とする日英語の指示表現の翻訳のパターンを分析し、統計をとってきた。この論文では、日本語の小説とその翻訳を用い、その結果をこれまでの研究と比較する。さらに、「日本語で指示表現なし→英語の再帰形」という翻訳例をいかに取り扱うかを考察する。

清水, 宇津呂, 伝, 中村(1997a,b)では講談社の和英辞典の電子化テキスト、清水(1998)では19世紀のイギリスの小説家Elizabeth Gaskellの3編の短編小説とその翻訳の電子化テキストを分析したが、この論文では夏目漱石著『こころ』の原文と英訳の電子化テキストを分析する。分析の仕方であるが、源言語(本論文では日本語)の再帰形が目標言語(本論文では英語)においてどのような指示表現に翻訳されるかという点のみならず、源言語においてどのような指示表現が目標言語の再帰形に翻訳されるかを調べる。それぞれのタイプの対応を分析した後、結果を比較してみる。

2 日本語の「自分」 - 英語の指示表現

日本語の再帰形は295例存在する。英語においてどのような指示表現に翻訳されるかを分析した。分析結果が図1である。比較のため、Gaskellの短編小説および和英辞典の分析結果も併記している。

| 日本語 英語 | 漱石 295例 | Gaskell 100例 | 和英辞典 146例 |
|-----------|-------------|--------------|-------------|
| 再帰形 | 12.9%(38例) | 12.9%(38例) | 21.0%(32例) |
| 代名詞 | 65.4%(193例) | 65.0%(65例) | 70.0%(105例) |
| 名詞句 | 6.8%(20例) | 2.0%(2例) | 1.3%(2例) |
| self+x | 0.3%(1例) | 0.0%(0例) | 3.0%(3例) |
| 空表現 | 13.9%(41例) | 7.0%(7例) | 3.7%(4例) |

図1 日本語の再帰形と英語の指示表現の対応

英語において再帰形に翻訳されるものは38例あり、12.9%を占める。うちわけは、他動詞の目的語28例、前置詞の目的語5例、単独で付加詞となるもの2例、前置詞を伴う付加詞8例である。(1)に再帰形に翻訳された例をあげる。

(1) それが嬉しいんだって、御父さんは自分でそう云っていましたぜ

He **himself** was saying to me how fortunate he was that I should have graduated while he was still healthy, and not after his death as he had feared.

代名詞に翻訳されるものは、193例あり、65.4%である。うちわけは、所有格95例、所有格+own1例、主格83例、対格14例、所有代名詞1例である。主格83例の中には、主格+付加詞の再帰形9例、主格+所有格+own1例、主格+付加詞alone1例が含まれている。(2)に例をあげる。

(2) 然しどう間違っても、私自身のものです。間に合せに借りた損料着ではありません。

I did not borrow them for the sake of convenience as a man might a dress suit.

名詞句に翻訳されるものは、20例、6.8%存在する。(3)に例をあげる。

(3) これは病人自身の為でもありますし、又愛する妻の為でもありましたが、もっと大きな意味からいうと、ついに人間の為でした。

I did so for the invalid's sake, and for my dear wife's too; but I felt also that I was in some way helping the whole of mankind.

接頭辞self- に翻訳されるものは、1例、0.3%である。(4)に例をあげる。

(4) 妻の忠告で止めたというより、自分で厭になったから止めたと言った方が適当でしょう。

Finally, I gave up drinking: one might say that it was self-disgust, rather than my wife's reproaches, that made me stop.

この論文では、相手言語の中に対応する指示表現が存在しないことを、空表現と呼ぶことにする。空表現に翻訳されるものは、41例、13.9%存在する。いわゆるゼロ代名詞を含む他に、定冠詞the、the same、疑似分裂文、強調のdo、その他に書き換えてあるもの、再帰形すべてあるいはselfの部分の削除等がある。(5)に例をあげる。

(5) 先生に限らず、奥さんに限らず、二人とも私に比べると、一時代前の因襲のうちに成人したために、そういう艶っぽい問題になると、正直に自分を開放するだけの勇気がないのだろうと考えた。

I liked then to think that his reluctance to discuss such a matter was due to timidity born of the conventions of a generation ago.

代名詞が一番多く、次が再帰形、空表現であり、名詞句やself+Xは少ないというのが全体的な傾向である。個々のタイプの割合も全体的にかなり似ている。ただ、漱石の小説では、再帰形の割合が他のデータより少なく、空表現の割合が他のデータより多い。注意しなければならないのは、Gaskellの短編小説の翻訳の方向が、英語→日本語だということである。漱石の小説、和英辞典の日本語→英語とは反対である。にもかかわらず、極めて類似した結果がでていいる。しかも、漱石-Gaskellの方が、漱石-和英辞典よりも似ているというのは、非常に興味深い。

3 日本語の指示表現 - 英語の x-self/selves

英語の再帰形は295例存在する。日本語のどのような指示表現が英語の再帰形に翻訳されるかを分析した。分析結果が図2である。

| 英語 日本語 | 漱石 291例 | Gaskell 83例 | 和英辞典 280例 |
|-----------|-------------|-------------|-------------|
| 再帰形 | 16.2%(47例) | 30.1%(25例) | 11.4%(32例) |
| 代名詞 | 6.9%(20例) | 5.8%(4例) | 2.5%(7例) |
| 名詞句 | 4.8%(14例) | 15.5%(12例) | 23.6%(66例) |
| 自+x (名詞) | 3.1%(9例) | 1.2%(1例) | 4.3%(12例) |
| 空表現 | 69.0%(201例) | 49.4%(41例) | 58.2%(163例) |

図2 英語の再帰形と日本語の指示表現の対応

再帰形は、47例、16.2%である。代名詞は、20例、6.9%である。内訳は、「私」16例、「おれ」1例、「あなた」2例、「あなたがた」2例である。いわゆる3人称代名詞は見られなかった。

(6) つまり相手は自分より強いのだという恐怖の念が萌し始めたのです。

It was the fear of a man who sees before him an opponent stronger than himself.

(7) その位先生に忠実なあなたが急に居なくなったら、先生はどうなるんでしょう。

Then what would happen to Sensei if such a loyal companion as yourself were suddenly to leave him?

名詞句は14例存在し、4.8%である。接頭辞「自+」「独+」を含む名詞句は、9例、3.1%存在する。

(8) 「これは家で拵えたのよ」

"I made this **myself**, you know."

(9) 彼の性格から云って、自活の方が友達の下に立つより遙かに快よく思われたのでしょう。

It was in his character to feel greater pleasure in being able to fend for **himself** than in receiving assistance from his friend.

空表現は、201例、69.0%である。

(10) 私は彼に向って、余計な仕事をするのは止せと云いました。そうして当分身体を楽にして、遊ぶ方が大きな将来のために得策だと忠告しました。

I told him that for the good of his own great future, he should rest and enjoy **himself**.

図1と比較すると、図2のそれぞれのデータ中の個々のタイプの割合は、相互にそれほど似てはいない。だが、空表現が一番多く、次が再帰形であり、自+Xは少ない、という全体的な傾向は同じである。ただ、和英辞典では、再帰形より名詞句の方が多いし、漱石では、代名詞が名詞句より多い。また、Gaskellの短編小説の翻訳の方向が、英語→日本語、漱石の小説、和英辞典の翻訳の方向が、日本語→英語であるのに、図1では、漱石-Gaskellの方が、漱石-和英辞典よりも、個々のタイプの割合において似ていた。しかし、図2では、名詞句を除外すると、漱石-和英辞典の方が、漱石-Gaskellよりも似ているようである。

4 日本語の空表現と英語の再帰形

前述したように、日本語の指示表現中、英語の再帰形に翻訳される69.0%は、空表現である。空表現という同一タイプに括っているが、いくつかのサブタイプに別れる。

まず、顕著であるのが、(11)のような例である。

(11) 母は父が庭へ出たり脊戸へ下りたりする元気を見ている間だけは平気でいる癖に、こんな事が起るとまた必要以上に心配したり気を揉んだりした。

When my father had **shown himself** well enough to wander about the garden or the backyard, my mother had been unduly optimistic.

日本語では「出る」という自動詞が、英語ではshow oneselfという他動詞+再帰形に翻訳されているのである。他にも、「来る」→present oneself、「遊ぶ」→enjoy oneself、「節約する」→stint oneself、「宿る」→lodge oneself等がある。また、データ中にはなかったが、「くり返す」→repeat oneself等も類例であろう。

国広(1980:2)は、(12)のような現象の存在を指摘している。

(12) Here the river divides (itself) into two branches.

国広は、(12)のような現象を他動詞の目的語省略と呼んでいる。再帰形が省略されても意味が変わらないからである。(11)およびそれ以下の例には、(12)に類似する点がある。同じ意味を表すのに、自動詞と他動詞というふたつの表現が存在するという点である。ただし、(12)が英語という同じ言語内の現象であるにたいして、(11)は日本語と英語という異なる言語にまたがる現象であるという違いがある。また、英語に翻訳する際、show、lodgeは再帰形が省略できるが、他は省略できない。

このサブタイプの取り扱いであるが、ひとつの可能性は、いわゆるゼロ代名詞、PRO、pro等に準ずる現象とみなすことである。翻訳の方向が問題となる。英語の再帰形→日本語の空表現は比較的容易だろう。存在するものを削除するからである。日本語の空表現→英語の再帰形はそれに比べると困難であることが予測される。中岩(1998)等のゼロ代名詞とその指示対象の自動認定の研究が参考になるかもしれない。

あるいは、もっと表層のレベルで取り扱うことができるかもしれない。多くの場合、英語の他動詞+再帰形は、辞書に記載されているからである。ただ、辞書によって、見出し語として動詞+再帰形が掲載されているものと、動詞と再帰形が共起すると定義中に説明的に記述してあるものがある。また、再帰形が省略できるものについては、省略する場合としない場合の、例えば意味的な、違いなどを明らかにする必要があるかもしれない。

次のサブタイプは、(13)のようなものである。

(13) 私は急に父が居なくなって母一人が取り残された時の、古い広い田舎家を想像して見た。

I pictured to myself the large, old country house without my father, and with only my mother living in it.

英語の翻訳中の再帰形は、Kuno(1987)がロゴフォリックと呼ぶような、発話、思考に関連するタイプの動詞と共起する。日本語の母国語話者の感覚では、再帰形は余計であるように思えるが、英語の母国語話者の観点では、内省、独白を示すために必要なであろう。「思う」->think to oneself、「心の中で繰り返す」->say to oneself repeatedly 等がある。「何遍も心のうちで繰り返す」->repeatedly ask oneselfという翻訳もある。

このサブタイプは、表層のレベルで取り扱うのはやや難しいかもしれない。通常の辞書では、何を見出し語にするかという問題があるからである。機械翻訳の辞書では、それほど問題にはならないかもしれないが、日本語と英語の間に、「繰り返して自分に問う」というような書き換えが必要かもしれない。

この点に関連するのが、(14)のような例である。

(14) 日本人、ことに日本の若い女は、そんな場合に、相手に気兼ねなく自分の思った通りを遠慮せずに口にするだけの勇氣に乏しいものと私は見込んでいたのです。

I thought that Japanese people, especially Japanese women, lacked the courage to be bluntly truthful on such occasions.

日本語の「口にする」という動詞を主要語とする表現が、英語ではtruthfulという形容詞を主要語とする表現に変換されているのである。中村(1982:52)は、翻訳家の翻訳における品詞変換について論じているが、品詞変換ということをもっと包括的に考えなければならないのかもしれない。

最後のサブタイプは、知覚、心的状況を表すものである。

(15) 私は稍ともすると机にもたれて仮寐をした。

Often, I found myself dozing over my books,

「一と感じる」「一するようになる」「時々一することがある」「ややもすると一する」->find oneself、「一する気になる」->bring oneselfの例もある。

(15)のようなサブタイプの取り扱いは、他のサブタイプより複雑である。英語の辞書ではbringやfindを主要語として記載するとしても、日本語の辞書では何を主要語とするか決定するのが難しいからである。「する」ではあまりに漠然とする。むしろ、「時々」、「ともすると」、「ややもすると」等の副詞が主要語となるかもしれない。非連続的な表現を認識しなければいけないし、品詞変換ということも考えなければいけない。

資料

Gaskell, Elizabeth (1850), *Lizzie Leigh*, 「リジー・リー」(松岡光治訳)

—— (1852) *The Old Nurse's Story*, 「婆やの話」(松岡光治訳)

—— (1862) *Six Weeks at Happeheim*, 「ヘッペンハイムの六週間」(相川暁子訳)

夏目漱石(1914)『こころ』新潮文庫の100冊

Natsume Soseki (1957) *Kokoro*, translated by Edwin McClellan, Oxford University Text Archive

清水篋, 成田(1979)『和英辞典』(講談社学術文庫)

参考文献

国広哲弥(編)(1980)『日英比較講座文法2文法』(大修館)

Kuno, Susumu (1987) *Functional Syntax: Anaphora, Discourse and Empathy*, Chicago University Press

中岩浩巳(1998)「日英対訳コーパス中のゼロ代名詞とその指示対象の自動認定」『情報処理学会研究報告』, vol.98-NL, no.123, pp33-40

中村保男(1982)『翻訳の秘訣』(新潮選書)

清水, 宇津呂, 伝, 中村(1997a)「日英語の再帰形におけるアラインメント問題」『言語処理学会第3回大会発表論文集』

清水, 宇津呂, 伝, 中村(1997b)「和文英訳における再帰形のアラインメント問題」, 『認知科学学会年次大会発表論文集』

清水眞(1998)「日英語の指示表現のアラインメント問題について」, 『JELS15, 日本英語学会研究発表論文集』